

西尾哲夫、東長靖(編)『中東・イスラーム世界への30の扉』ミネルヴァ書房 2021年 xiii+365+5頁

本書は人間文化研究機構(NIHU)現代中東地域研究プロジェクト「地球規模の変動下における中東の人間と文化——多元的価値共創社会をめざして」の成果の一部として出版されたもので、中東・イスラーム世界を理解するために必要な30項目を選び、それらを関連するテーマごとに5部にわけてわかりやすく解説したものである。

各項目の担当者は、それぞれ十分な時間をかけて専門的に研究を進めてきている立場から、優れた知見を披露している点も、本書の学術的価値を高めている。また、各扉の合間には、研究者たちの経験に基づいたユニークな見解を簡潔にまとめた15の「コラム」が配置されており、単に研究成果を公表するだけでなく、中東地域の世情について読者の興味と関心を引き出すように工夫もされている。そのために、これから機会を得て、中東・イスラーム世界を専門に研究しようとする人々には、自分が関心を持つテーマを探すのに役立つ入門書ともなっている。

しかし、あくまでも評者の見解であるが、本書のページをめくる前に注意してほしい点がある。それは中東・イスラーム世界の研究について初心者と専門家とに「読み方」の相違が必要ではないか、という点である。

ここで表現されている「30の扉」は、単に初心者に向けた簡便でわかりやすい優れた入門書であるだけではない。幅広い視点から独自の見解が表現されているが、他の項目につながっていく研究の流れを把握してまとめる苦心がされていることも忘れてはならない。しかし、それぞれの項目の記述はかなりユニークで独自色が強い。すでに個別のテーマを立てて研究を確立している専門家にとっては、中東・イスラーム世界の横のつながりを再確認する貴重な機会となっているが、初心者にとっては、前後に配置されている論文が必ずしも自分のテーマに合致しない場合であれば、テーマを選択する際に困惑してしまう可能性もある。この点に注意をしながら、初心者には、まず自分に関心と興味を持つテーマの論文から目を通していくことが勧められよう。

それぞれの項目は、ページ数の制限の中で簡潔に短くまとめられているが、専門家であれば、行間に浮かび上がるグローバルな諸問題を見つけることができるであろう。それは、この「30の扉」を超えて中東・イスラーム世界からこの地球上の各地へと向かっていき、各地で共通する人類の諸問題に行きつくことであろう。やがて、自分の道を探すことのできた初心者も、中東・イスラーム世界から飛び出した深刻な問題指摘が、時あたかも新型コロナウイルスの感染拡大に立ち向かうように、私たちに新しい視野を、新しい世界の共存を、考えなおす良い機会となるように、仕掛けられていることに気づくであろう。

本書には、第30の扉の後に「終」の扉が「なぜ日本で中東地域を研究するのか?」というテーマで置かれている。この扉で熱く語られていることは、本プロジェクトを貫く統一テーマであるが、最初と最後の二か所に分けて置かれても良かったかと思われる。そうすれば、読者はまず、最初にこの統一テーマを読むことによって、本書の意図を理解することができ、最後に再びこのテーマの詳細な理論展開を学ぶことによって、これまで読み進めてきた30篇の論文の意図を改めて心に刻むことになるはずである。

繰り返しになるが、本文だけで370頁という大部の書籍であるが、話題が項目ごとに分かれているので、読者は関心のある箇所から読み始めてもよく、どこから読んでも丁寧でわかりやすいように工夫がこらしている。そのために、本書は学生や初心者だけでなく、多くの人々に読まれてこそ、その本領が発揮できる。

各扉の最後に参考文献があげられているが、重要なものだけにしたためか、まだページに余白があるにも関わらず、3冊～4冊程度しか紹介していない。初心者が参考にするのを考えれば、可能な限り余白一杯に掲載しても良かったかと思われる。

それではそれぞれのテーマの検討に入ろう。

第I部 歴史の扉——日本と中東の往還

1. 近代日本の中東発見——扉を開いた幕末・明治の先人たち(黒田賢治)

幕末から明治にかけて、数人ではあるものの日本人が中東地域を訪問した。それまで日本人が直接現地を訪れて現地の人々と交流したという事例はほとんどなく、これが日本人が中東の人々と直接交流を持つようになった初めての例でもあった。本扉では、「侍とスフィンクス」の写真でも知られる1862年の文久遣欧使

節団を最初として、当時の政府による西洋文明の調査のためにヨーロッパ視察に訪れた派遣団のメンバーたちも、個人で冒険旅行を敢行した人々でさえも、当時の日本人の多くが一樣に植民地下の現地人の倫理観のなさに批判の目を向けていることを明らかにしている。

しかし、反対に、西洋の植民地下に暮らす中東の住民たちが無銭旅行の日本人に親切にしたことが、それぞれの旅行記に書き残されている。中には陸軍の命を受けて諜報活動のために訪れる人もいたが、咎められることもなかったようである。

ここには、幕末から始まった日本と中東とのかかわりが、日本が中東を単に西洋への入り口として利用しようとした点に、今日につながる中東やイスラームにかかわる蔑視や無理解の原点が残されているように思われる。

2. 近代日本と資源外交——ミイラ取りから石油まで（保坂修司）

中東地域の石油の歴史は古く、ヘブライ語聖書にも瀝青として防水材料などに用いられていたという記述があるが、著者は、石油をめぐる利権争いが発生するのは19世紀後半からであり、ペルシア、英国、ロシアなどの間で激しい利権闘争が発生したことを皮切りに、今日に続く石油の争奪戦の歴史を、手際よく解説している。日本はこの争奪戦に乗り遅れたが、1921年に初めてイランからの石油を輸入した。その後は苦勞を重ねて、バハレーン、イラク、サウジアラビアなどの産油国からの輸入が増えていった。

著者は、日本のこの経緯が軍事産業との癒着で行われたために、敗戦後には中東にかかわる石油戦略をゼロから始められなければならなかったことを残念がっている。

脱炭素社会を目指す今日の世界では、化石燃料の使用に関して、難しい問題があげられる。そこでは、中東地域の原油取引を単に経済問題としてみるのではなく、今後の研究テーマとしては、環境問題とのかかわりで、その地域の政治や社会の変化を丁寧に検討することが要請される。

3. 戦前日本の中東表象——福沢諭吉から大東亜共栄圏まで（三沢伸生）

ここでは第1扉で検討した明治維新後の日本と中東との関係が繰り返され、第2次世界大戦までの中東とイスラームに関する日本人の認識に至る経緯が簡潔に説明されている。そして戦間期において、これまでの中東圏という認識から、「回教圏」という表象が現れるようになる。それは1934年に大久保幸次と小林元が共著で『現代回教圏』という著書を出版したことに拠るとされる。その後、大久保は回教圏攷究所を設立して、イスラームについて客観的な研究を行った。ここでは、大久保がなぜ「イスラーム」ではなく「回教」という用語を用いたのか、明確ではないが、当時、日本政府の「アジア主義」に基づく「イスラーム教徒接近策」が動き出しだしていたという。軍部の強い影響下で「大日本回教協会」も組織されていた。それは第2次世界大戦時に東南アジアのイスラーム教徒を取り込むための策略でもあり、戦後には消滅してしまう謀略でもあった。そのために、石油戦略と同じく、日本は戦後に改めて中東地域との関係構築に打ち込むことになったが、著者には1970年代のオイルショックに至る過程にも研究の手を広げてほしい。

4. 迷子のバラの物語——近現代日本の陶磁器輸出と中東（椿原敦子）

名古屋を中心とする中部地方では19世紀後半より陶磁器の量産が行われるようになり、伊万里焼、京焼、九谷焼の職人が名古屋に招かれて輸出用の陶磁器が作られるようになった。これらの輸出向け陶磁器が明治後期から大正期にかけて、主にトルコ、エジプトへ輸出された。その後も輸出先は増え続けたが、日本製品は総じて廉価で粗悪という印象がついてまわっていた。やがて、日本製陶磁器の品質も向上し、中東では結婚の祝い品として、大家族用のディナーセットが盛んに売られるようになったという。イランでは、セット商品ではなく、いつでも必要な分だけ購入できる同じバラ模様の食器が好まれていた。この「迷子のバラ」は困難を乗り越えて、イランの国民柄ともいわれるものへ発展したと著者はいう。こういった庶民の暮らしに紛れ込んだ小さな暖かい話題も、等身大の現地研究として、実は大変に貴重なものである。

5. グローバルスポーツとしての武道——カラテからエジプト社会を考える（相島葉月）

ジュードーもカラテもオリンピック種目となっているが、もともとどこで生まれ、どのような歴史を持つ

たスポーツなのか、知っている人は、発祥地の日本でも少ない。ましてエジプトで空手を学校教育に取り入れようとするには、大きな矛盾が伴う。日本大使館が支援をした武道イベントの様子はもろ手を挙げては喜べないものであったようだ。純粋に世界的スポーツの一環として子供たちが参加するためには、どのような計画が必要なのか、十分に考えて計画を立てることが重要だと、教えてくれる論文である。本論を読んでいると、武道と日本文化を取り違えているのは、実は日本のほうではないのか、と思えてくる。こういった誤解に基づく国際交流の現場を取り上げることも、現地に立脚した国際交流の実現のためには重要なテーマである。

6. 「グローバルご近所」の誕生——大塚モスクの支援活動とネットワーク(岡井宏文)

本扉は東京都豊島区大塚に位置する大塚モスクのネットワークについて、その調査報告である。大塚モスクは日本イスラーム文化センターを運営団体として活動を展開している。大塚モスクの活動は地域に向けた活動、国内外での支援活動などであり、地域の年中行事にも参加している。海外への支援活動では、アフガニスタン、パキスタン、シリア、ロヒンギャ難民キャンプ、インドネシア、イエメン、トーゴ、スリランカなど多岐にわたっている。

国内支援としては、東日本大震災の被災地への支援が中心となるが、ホームレス支援や難民支援なども継続的に実施している。こうした支援活動を通して、ムスリムだけでなく非ムスリムも参加できる活動を可能としてきたことで、近隣社会から世界の難民支援まで、「グローバルご近所」を形成してきたことに特徴がみられる。日本のムスリム人口は拡大しつつあり、全国で100か所ものモスクや礼拝所が建設されている現在、大塚モスクが提供するネットワークの活動継承が成功するかどうかが、今後の注目点でもある。

第II部 宗教・社会の扉——つながりと公共圏

7. 公共空間としての新たな部族社会——ヨルダンのディーワーンをめぐる(岩崎えり奈・北澤義之)

近年、日本でも中東でも「公共」概念を新たにとらえなおす動きが盛んになってきた。中東では2011年春に始まったいわゆる「アラブの春」では公共空間が政治変革に貢献するという新しい出来ごとを通じて、国家と個人の関係性が再編されることになった。本扉は、中東ではこの関係性のなかに、これまでは除外されていた「宗教文化的な要素」も公共空間に取りこまれるようになったことを明らかにしている。

例えば、1980年代以降のヨルダンでは、部族成員の集会所ディーワーンが諸部族の行事を行うために重要な場所となったという。ディーワーンは様々な規模の部族の独自性を発揮する場でもある。

イギリスの委任統治下で移住してきた外部勢力であるハーシム家によって成立したヨルダン・ハーシム王国は、この部族社会に組み込まれることによって形成された。1948年のイスラエル建国に伴いヨルダン国内には人口の7割以上を占めるパレスチナ難民を抱えることとなり、国王は国民統合などの策を図ったが、成功しなかった。ヨルダンにはパレスチナ難民とともに、土着のヨルダン人、ロシア帝国から逃れてきたチェルケス人などが住むが、それぞれが部族を形成するようになった。やがて、彼らは部族的紐帯の象徴としてディーワーンを建設して、若者を中心とする開放的な運動も起きてきた。伝統的な部族を中心とするヨルダン社会で、このように若者による新しい部族的要素は、伝統的な紐帯ではない点が注目されて、新しい社会変化として容認されてきたようである。

8. 聖なる血筋の効力——インドネシアの預言者一族(新井和広)

一神教の原則に基づいて、公式には救世主や聖者の存在を認めないイスラームでも、民間信仰のかたちでは、様々な種類の聖者は存在する。インドネシアでは預言者ムハンマドの末裔が数多く暮らしているという。彼らはインドネシア生まれで国籍もインドネシアであるが、サイイド、シャリーフといった尊称で呼ばれる。彼らの多くは、10世紀にイラクのバスラからイエメンのハドラマウトへ移住した人物を起源としていて、ハドラマミー・サイイドと呼ばれる。

インドネシアでは近年、ハドラマミー・サイイドの活動が目立っている。その転換期は1990年のイエメンの南北統合であった。特に南イエメンは社会主義体制下で宗教活動が制限されていたが、1990年以降、イエメンの南端に広がるハドラマウトへの往来が自由となり、その地での宗教教育も復活した。こうしてサイ

イドたちは宗教活動を活発させ、特に宗教者はハビブと呼ばれたという。

著者は最後に「預言者一族の価値は何か」を挙げて、彼らが宗教活動を展開することには高い評価が与えられるが、彼らが必ずしも「預言者一族」であるというだけで評価されるものではないとする。彼らは宗教活動が評価されてこそ、預言者一族の血筋が意味を持つてくるといわれるが、預言者一族ではない一般人の宗教活動は評価されることがあるかという点については、著者は何も語っていない。

9. 名前のないアラブ人——フランスの北アフリカ移民（稲葉奈々子）

フランスはアルジェリアをはじめとしてアフリカに多くの植民地を抱えていた。植民地をテーマにしたフランス語文学の代表的なものがアルベール・カミュの『異邦人』であることはよく知られている。『異邦人』のアラブ人男性には名前がなかった。

一方、イギリスの植民地を対象としたポストコロニアル文学では、早い段階から登場人物のアフリカ人には名前が付けられていた。しかし、フランス文学のなかで、この問題が取り上げられポストコロニアリズムの議論が現れるのは2000年代になってからのことである。

名前に関するアフリカ・北アフリカからの移民の待遇とイスラーム女性の立場、この二つの問題は混同してはいけないのか、あるいは名前のないアラブ人とヒジャーブを被るイスラーム教徒の女性との立場を同種のものとしよいか、混同なのか、人権問題を含んだ議論は結論が出ないように見える。

公的な空間ではライシテ（政教分離政策）の原則を守れと言ってムスリマのヒジャーブを禁止するフランス政府と、ヒジャーブを被ることで自分たちの人権を主張するというムスリマの運動には、今後はポストコロニアリズムの議論も加わって、社会に向けて大きな変動を促すことになる可能性があるが、難民の女性やその家族の人権を考えると、解決不能に見える難しい問題も含まれていることを忘れてはならない。

10. メディアでつながる人々——共同体意識の変容（千葉悠志）

急激な情報化は世界中で進行している。これによって世界のメディア状況は一変したが、最も大きな変化は共同体意識の変容であろう。そこで本書でも「中東においてもメディアによる共同体意識の変容はあったか」について検討された。中東、特にアラブ地域には2種類のナショナリズムが存在する、という。国境線を超えてアラブ民族に共有される「アラブナショナリズム」と一国単位の「ナショナリズム」である。1960年代から1970年代にかけて、「アラブナショナリズム」が大いに利用されたが、1970年代以降になると、一国ナショナリズムの時代に入っていった。中東のラジオ放送が取り上げられる際には、今日でもこの2つのナショナリズムとの関係で論じられている、という。

一方のテレビは1970年代から1980年代にかけて各家庭に普及が進んだが、やがて衛星放送が発達すると、インターネットの普及が進み、世界中に自分の見解が簡単につながるという超法規的な現象が起こっている。このような現状の中で、最も危惧されるのは、急進的な思想や過激派の活動なども規制されることなく世界中に広がることである。今後、中東地域を含めて、社会学的にはどのように規制され、安全性が保たれるのか、著者の新たな研究が待たれる。

11. 母語でも外国語でもない言葉——アラブ人とフランス語（鶴戸 聡）

北アフリカ諸国やレバノンへ行くと、アラブ諸国の一員であっても、流暢なフランス語に取り囲まれるという経験をする。これらの国々が旧宗主国のフランスから独立して60年を超えるが、現在でも多くの人々がフランス語を使用して日常生活を送っている。しかもそのフランス語は植民地にありがちな現地語の訛りと語彙が縦横に混濁しているような類のものではない。彼らのフランス語はフランス本国から派遣された小中学校の教師たちの努力によって、ほぼ宗主国と同様のフランス語が同化政策の下で教育されたからである。

同様に、マグレブ地域のチェルニジアやアルジェリア、モロッコにおいても、現在でも教育を受けた人間はアラビア語とフランス語の読み書き能力を持っていて、特に高等教育はフランス語で行われるために、若者にはフランスへの留学が有利になっている。

著者はアルジェリアのフランス語の例を挙げているが、時代とともに変わりゆくフランス語使用の在り方

が、今後は大きな関心をもって研究されることに期待をにじませている。

12. 世界は神とつながるモノにあふれている——マテリアリティとイスラーム(二ツ山達朗)

イスラームという一神教信仰の場で、護符として身の回りに多くの多神教につながる「モノ」を見つけることができる。一神教でありながら、聖者崇敬を行うのは、ユダヤ教にもキリスト教にも見られる現象であるが、意外なことに厳格な一神教のイスラームにも聖者崇敬が盛んである。預言者ムハンマドの聖廟や聖遺物をはじめとして、聖者廟、聖遺物、聖水など、世界各地で数えきれないほどの聖遺物が崇敬されている。

一神教の信仰の中で、聖遺物への崇敬をどのように理解するのか、という問題には多くの説があるものの、正式に決まった解答はないようである。人間世界から遠く超越した唯一の神に近づき、心の救済や現世利益を得ようとする人々にとって、身近な聖者は頼もしい存在であるということもできる。こうした民衆信仰の存在が、超越的な絶対の神の救済を身近に感じさせてくれる存在であると考えられよう。著者も「イスラームの実践に関わるモノとヒトの関わりに注視し考察することは、モノとムスリムの理解のみならず、我々が自明としてきた宗教概念をも考え直すことにもつながる射程を担っている」とする点は今後の研究に生かされると期待される。

第III部 経済・産業の扉——石油の先にあるもの

13. 資源をめぐる共生——雨乞い儀礼と聖者命日祭から考える(縄田浩志)

本論では、資源を分かち合う掟としての文化と分かち合う作法としての文化を考察する。砂漠や乾燥地域で暮らす人々には共通して「分かち合う作法」とも呼べる文化が存在している、と著者はいう。希少な資源をめぐる争いごとが起こるのが人間社会の常であるが、「人間が発達させた掟があるから」暴走しないで自己を律することができる、とされる。そのような「掟」として雨乞い儀礼と聖者命日祭がある。本扉ではスーダン東部紅海沿岸における家畜の犠牲をささげる儀礼と祭りを扱っている。

このような部族が行う儀礼と祭りであるが、従来、資源をめぐる異民族間の調整を行うという意味があり、相互扶助の意味合いも持っていた。近年になって周辺の国境争いが発生するようになり、スーダン軍と国境を接しているエリトリア軍との抗争事件がおきるようになった。こうした戦闘によって放牧も制限を受けられるようになったことは、人々の平穏な暮らしを妨げるものであり、著者の研究の継続も危惧される。

14. 変貌するオアシス農業——市場経済とナツメヤシの品種多様性をめぐって(石山 俊)

中東で暮らしていれば、どこからかナツメヤシの実が届くことが多かった。評者の借家の庭にはナツメヤシの木が植えられて、1本でも1つの家族がその年に十分に食べられるほどの実りがあったことも忘れられない。その一本の木も、低木で大粒の実が取れる木は、日本円で10万円もするという。著者が「オアシスの人々はナツメヤシをあますところなく利用してきた」というように、アラビア半島から北アフリカ一帯まで、評者が歩いた中東の土地には、どこまで行っても、農園だけでなく、街路樹としても、王宮の庭園の緑の飾り木としても、1本か2本だけの個人宅の家にも、どこまで行ってもナツメヤシが目に入ってきた。

著者はナツメヤシを基点としてオアシス農業の変遷を研究してきたが、商業栽培に伴って、地元の固有種が急激に減っている現状を訴えている。どの国でも商業政策上、売れる作物が主体となる傾向があり、品種の多様性が崩れ、伝統的な固有種は次第に見えなくなってきた。オアシス文化の継承に役立つ品種の保存は、どの国・地域でも必要なことである。

15. 石油を輸入する産油国?——新時代を迎える中東とエネルギー問題(掘抜功二)

著者によると、2038年にサウジアラビアが「エネルギー生産国からエネルギー消費国になる」という予測が発表されたという。つまり、サウジアラビアは石油輸入国になってしまうということである。

日本は石油の約90%、天然ガスの20%を中東に依存している国であり、中東の石油は日本経済の命綱である。数年前まで、中東の石油は最大限見積もっても、あと30年か40年で枯渇するといわれていた。それが再生可能エネルギーへの変換が叫ばれて、中東の石油も、まだしばらくは使用できるといわれるようになった。安心していいのか、心配すべきなのか、不安な状況ながらも、自然エネルギーへの転換を期待し

て、省エネに努めている評者である。著者は湾岸諸国においても再生可能エネルギーの導入についても具体的な数値目標を設置しているという。

16. 宗教がツーリズムと出会うとき——観光資源化する宗教遺産 (安田 慎)

3つの一神教が発生した中東地域には、公式・非公式を問わず、貴重な聖地が数多く存在する。これら3宗教の信徒による信仰上の聖地巡礼や参拝と同時に発生した宗教の観光資源化は現在重要な側面を迎えている。中東地域の人気の聖地を抱える国や地域には、宗教遺産だけでなく、世界遺産も非常に多く、まさに観光産業が発展する要素が多い。観光業によって、宗教資源はますます重要性を増すものである。

しかし、どの国も他の産業が乏しく、国家の経済に貢献するだけの力を持った産業が発達していない。つまり、観光業以外の産業が乏しいのである。観光産業は、社会が安定してこそ盛り上がるものである。したがって、テロや社会不安などによる観光客の激減は聖地保全にも深刻な影響がでる。

この点について著者は「中東における宗教の観光資源化の動きは、宗教資源、宗教空間、宗教経験の3領域での流動化を生み出している点を確認した。その中で……(中略)……諸アクターが市場を通じて宗教資源にアクセスすることが可能となり、その結果として宗教資源を用いた多種多様な商品・サービスが展開されるようになっている点を確認した」として「流動化によってもたらされる『民主化』の動きが」効果的ではないかとしている。果たして宗教資源の流動化が効果的かどうか、次の段階を見守りたいと思うものである。

17. 変わるハラール——食の安全と産業化の先で (黒田賢治、高見 要)

評者は、本来のイスラーム法に基づくハラール認証と、食品輸出のためのビジネスとしてのハラール認証とはどのように異なるのか、と考えてきた。東南アジアから、まだイスラーム教徒が少数派である日本などへの輸出食品のハラール認証について、疑問を感じるがあったからである。ある講演会で、トルコ人の講師から「ある食品に含まれるアルコール濃度が、例えば0.005%以下であればハラールとされる」といったハラール認証の基準を聞いたのである。実際の数値は忘れてしまったが、まるで薬の濃度を測るかのようになり、極めて微量のアルコールをも避けようとする話であった。

このような立場での判断は、信仰の立場で許可されるものであろうか。許可基準がますます狭められてくれば、ムスリムの食事についての差別にはならないであろうか。著者も「神が何を認めるのかを直接確認できない以上、一人ひとりが考え選択していくほかない」として、禁止事項であっても、個人の選択の幅を狭めることは本末転倒ではないかと思えてくる点については、理解ある判断だと思う。

18. 新しい経済を構想する——ポスト資本主義とイスラーム (長岡慎介)

21世紀に入り、これまでの資本主義に危機感を感じる人が多くなったといわれる。従来の銀行を信頼しないで、アップルやアマゾンなどに期待感を寄せる人々が増えてきている。そこで、フィンテックという取り組みがサイバー技術を活用しながらグローバル経済の世界を変えようとしている。

このように言われても、申し訳ないことに、評者などは何も理解できない。近年「利子なし銀行」として世界の金融市場に注目を与えているイスラーム銀行も、すでに「普通の銀行システム」になってしまった感がある。著者はクラウドファンディングと暗号通貨が新しいワクフの開発に効果的だと強調している。著者が言うように「イスラーム経済の知恵は人類全体に役立ち普遍知となりうる」ことを期待するばかりである。

第IV部 政治の扉——現代中東・イスラーム世界を知るために

19. 制度の裏に潜むもの——多様な選挙と政党 (松本 弘)

著者は、中東各国の選挙と政党についての制度を、非アラブ諸国(イスラエル、トルコ、イラン)、アラブ共和制諸国(レバノン、イラク、チュニジア)、アラブ王制諸国(モロッコ、クウェート)とに分けて検討する。ここで王制諸国の枠に入らない王制国家のなかで、サウジアラビア、アラブ首長国連邦、カタール、オマーンは立法権を有する議会が存在せず、立法権は国王にのみ属する。その一方、「モロッコ、ヨルダン、クウェート、バハレーンでは議会が立法権を有し、議会のための選挙制度もある」とする。クウェートでは

2005年に女性参政権が認められているが、評者の調査では、女性議員はまだ誕生していない。それぞれの選挙制度に問題点がみられるが、クウェートでは、総選挙で野党勢力が増えると国王が議會を解散するので、政治的混乱が現在でも続いている。

20. イスラーム過激派は、いかに勃興したか——政治変動とテロのあいだで(小杉 泰)

著者は2001年の9・11事件から検討を始め、1979年に戻って、イランのイスラーム革命とイスラーム復興の歴史を振り返り、1979年2月のイランのイスラーム革命、11月のマッカのカアバ神殿占拠事件、12月には旧ソ連がアフガニスタンに侵攻するという、3件の大事件が発生していることを述べる。中東における過激派の運動がマルクス主義からイスラーム主義にとってかわった、という。1983年のころから自爆テロという戦術が始まり、アフガニスタンではソ連軍の撤退後に、新たな組織としてアル・カーイダが設立され、9・11事件へと続く。2011年にビン・ラーディンはアメリカの海兵隊特殊部隊に暗殺されたが、9・11事件の首謀者であったかどうかははまだ不明である。著者は「ビン・ラーディンが直接に企画したわけではなく」別の立案者がいたという説を採用している点は評者も納得できる。

21. 聖地の紛争とは何か——エルサレムをめぐる政治と宗教(山本健介)

この論文は「16. 宗教がツーリズムと出会うとき——観光資源化する宗教遺産」に関連する部分もあるが、「パレスチナと聖地」という聖地の政治的紛争にかかわるテーマでもある。エルサレムが3宗教にとって極めて重要な聖地であるとされる点が、3宗教の力関係によって困難な対立を引き起こすことにつながるからである。

嘆きの壁から神殿の丘(ハラム・シャリーフ)に上る坂道には、全イスラエル・ラビ協会の名で、進入禁止の札がかかっているが、イスラエルの兵士が侵入してくることがあると、騒動に発展する。しかし「数千年来の宿命的な因縁」などの表現は短絡的な表現であり、紛争の現実とは解離している、という著者の立場には評者も賛同する。ここには宗教的・民族的シンボルとしての価値と政治的動員、領有権・管理権の問題が重層的に重なっている。

1993年のオスロ合意以降、イスラエル政府によるユダヤ教徒の入場緩和が行われるようになった。ラビによる入域規制の看板は何かに役立っているのか？

著者は「聖地の紛争解決に関連した議論を行わなかった」としつつ、「今後も様々な角度から実証的な分析を継続する必要があることは言うまでもないだろう」としている。今後の研究の展開を待つことにしたい。

22. 紛争の断面図——宗派対立の虚像と実像(松永泰行)

「宗派とは何か」について著者は複雑な背景を説明しながら、「イスラームにおける正統と異端」については、イスラームには正統と異端を決定する機関はない、と説明する。

そして、レバノンの事例として、18のセクトがあることを示す。イランでは、言うまでもなくシーア派はセクトではなく、多数派である。

ボスニアの例をあげて、宗派・宗教とエスニックアイデンティティは国家による規定に過ぎないと説明した点は、分かりやすいが、宗派対立の背景は、単なる分派騒動でもなく、それぞれの時代によって対立の構図が異なり、判断に迷う点もあるということが理解できる。

著者が最後に述べた「宗派カテゴリー自体が国家により法制度で規定されていることが多く……」のように、人々が自由に自分のヒエラルキーの改編を求めることは、今日では困難になっているようである。

23. 難民危機を振り返る——シリアの変貌と海を渡った人びと(錦田愛子)

2011年にいわゆる「アラブの春」を契機にシリアの内戦が勃発したときは、1年程度で収まるかもしれないと思っていたものだった。それから、内紛は一時的でも止むこともなく、10年が過ぎた現在でも、危険は度合いを深めながら継続している。この間、シリア総人口の過半数を超える難民が増え続け、40万人もの死者数を数え、国内にも国外にも生命の危険にさらされながら、祖国へ戻れる日を待ち続けている。しかし、大半のシリア人が故郷へ戻れないまま時は過ぎていく。当初はドイツなどで受け入れられていたシリア

難民は、次第にどこへも行けなくなり、途中の海や森で死を迎える人も増えている。

著者は冷静な筆致で、この惨劇を描いているが、その心の奥は悲しみに潰されそうになっているように思える。国内が治まり、難民となっている国民が帰国できる日はいつ来るのか。紛争の解決のためにも、語り続けること、情勢を報告することが重要であり、私たちには現地の真実の姿を「知ること」がまず重要である。

24. 「民主的」な中東を目指して——イスラームと民主主義（末近浩太）

「アラブの春」以降の民主主義とは何か。残念なことに、残ったのは独裁者と過激派だけとなった。実は、中東でのヨーロッパからの独立直後の民主化の要求は、イスラーム主義者によることが多かった。民主化を求めるイスラーム主義者の中でも強い影響力を持っていたのがムスリム同胞団であった。その後、イスラーム主義者による最初の民主化要求が実現したのは1979年のイラン・イスラーム共和国の成立である。著者は「イスラーム主義組織・運動やイスラーム政党に共通してみられたのは、政治参加の仕組みとしての民主主義への親和性である」として、イスラーム主義と民主主義による政治の復権を主張している。この立場が「アラブの春」後の複雑な事態を乗り越えるために不可欠であると主張する。

評者は、中東諸国の民主化がおもにイスラーム主義者によって主張されてきたのは、いわゆる「語られない言葉」であったのだろうか、不思議な気持ちに襲われるが、著者がいうように、必要なのは穏健なイスラーム主義の復権であり、過激な運動ではなく、「中東諸国の一般市民に自己決定の権利と機会を保障することであろう」という主張には賛成である。新しい展開を予期させる議論であるだけに、さらに詳細な研究が期待される。

第V部 文化・精神の扉——イスラームからみる現代社会

25. 差異とともに生きる——イスラームにみる共生の知恵（東長 靖）

著者が言うように、イスラームにおける共存思想はクルアーンの中に多く見られるが、それだけではなく、たとえば「マディーナ憲章」では異教徒の保護政策である「ズィンマの思想」が確立されている。さらに著者が専門とするスーフィズムの共生思想には信仰者の内面的精神性を支える思想があるとされる。イスラーム法学の過度の強調は過激主義・急進主義につながるとして否定されるが、スーフィズムにイスラーム主義を対置させるとき、スーフィズムの寛容性・非暴力性が強調される。この場合の「イスラーム主義」は24扉で語られている政治的で温和な「イスラーム主義」とは性格が異なる。

著者はここから専門領域でもあるイブン・アラビーの「存在一性論」を紹介する。存在一性論では、私の存在も他人の存在も、そのほかのあらゆる現世の存在も、「すべては唯一絶対者の仮象的な顕れにすぎない」となる。著者が言うように、「このような考えは、非常に抽象度の高いものではあるが、共生思想と親和性のあるものだといえよう」という理解には、共存を支える共生思想の知恵をみることができる。宗教多元主義を提唱したジョン・ヒックも、イブン・アラビーの思想に影響を受けて、あらゆる宗教は同じ the Real との応答であるという多元主義を提唱した。

しかし、このような立場は、内面的な信仰上の決意を表明するものであるために、実現は非常に困難である。著者が「対等な関係」を損なうようなものが出てくる可能性があることと危惧することは、現地事情に立脚した観点から見て優れた見解である。

さらに「諸宗教の一致説」にみる諸宗教間の共生の実施として、最後に聖者廟詣での共生現象も紹介されている。民間信仰として実施される聖者崇敬の実施には多くの事例があり、著者の優れた現地研究にも含まれる。このテーマでの研究もさらに発展させてほしい。

26. 現代医学に挑戦するイスラーム法——生命倫理と信仰（森 伸生）

現代の生命科学とイスラームの世界観・死生観との共通点を探る試みが、特に臓器移植医療と幹細胞研究においては、脳死と人間に魂が宿る時期に関して、法学者間に論争が起きている。著者はこの論争の経緯を丁寧にたどっているが、すでにサウジアラビアで脳死による臓器移植が実施されている点については何も語っていない。

一般に厳格なイスラーム法を施行するサウジアラビアでは、脳死は人の死とは認められないと考える人が多い。しかし、サウジアラビアでは、イスラーム世界では極めて早い時期から、脳死移植手術を認めており、さらにリヤドに世界的な移植医療を行う施設も持っている。Saudi Center for Organ Transplantation (SCOT)はその前身が1979年に設立されたNational Kidney Foundationから1993年に名称変更した組織である。著者も言っているように、1989年1月28日にマッカでの会議で、法学者が脳死を人の死と認定し、イフター・イスラーム研究常任委員会も同日付で承認した。さらに本人の生前の意志がなくても移植ができることになり、今日まで世界的な移植センターとして発展している。資料によれば、1979年に最初の腎臓移植が行われ、1982年に法学者の脳死の認定に伴って、移植医療が発展したとされる(<<https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/18583843/>> 2021年10月3日確認)。

サウジアラビアでは、治療推進派と治療拒否派のどちらも預言者の教えに従っているとし、自分の環境に応じた見解を選べばよいとされる。著者がSCOTについて何も言及していないのには、何か理由があるのかもしれない。

27. 子のない人生を歩む——不妊治療ともうひとつの夫婦のかたち(村上 薫)

本論文は、最近になってようやく日本でも大きく取り上げられるテーマとなってきたが、それでも家族間の内側の秘め事に近い扱いを受けてきたという長い歴史が存在する。まして、不妊治療が性道德の遵守にはどの宗教や伝統よりも厳格なイスラーム世界で取り上げられるようになってきたことは、大きな進歩かもしれない。今日では、洋の東西を問わず、子供を望むが恵まれない夫婦は不妊治療を受けることが一般的となりつつあるものの、不妊については、女性に責任がなすり付けられることが多い。著者は主にトルコの事例を調査・研究しながら、近年の女性の意識の変化を描いている。興味深いことに、本扉に描かれているトルコのムスリマたちは、精神的に自立していて、人生を打ち込めるものを持っているように見えて、潔い。イスラーム世界の女性たちの意識も変わりつつあるという現状を教えてくれる研究である。

308頁に「イスラームが倫理基準の一つを担う中東では」とあるが、この文章では、イスラームは倫理基準のうちの「一つだけ」を担っていることになり、その他の倫理基準は他の規範から選ばれるという意味に読めてしまう。イスラーム教徒であれば、あらゆることがらについて、何よりもまずイスラーム法に従わなければならない。現代国家の市民法も、イスラーム法の前では効力を失う事例に事欠かない。イスラームは「一つの倫理基準」ではないはずである。ご検討いただきたい。

28. 「格差は正の処方箋」——定めぬ喜捨ザカートの発展(足立真理)

本来なら決まった金額を献金するのがザカートであったと思われるが、近代になってからは任意の金額を献金するようになってきたと理解していた。それが、現代の国家や共同体の中で新しくザカート徴収の規定が整備され、集まった金額も本来の用途に基づいて、貧者の救済や福祉に用いられるようになったという報告は、現代社会のシステムと伝統的なザカートのシステムをうまく適応させた事例として、興味深い。また現代風のザカート概念の変遷とコロナ禍に伴った臨機応変の対応に拍手をしたくなる。おそらくクレジットカードの使用は言うに及ばず、インターネットを使って献金をすることも、すでに始まっているかもしれない。私たちが気付かないうちに、中東のイスラーム社会の規範も大きな変化を迎えているが、新旧のせめぎ合いも今後、生じてくると思われて、興味深い。

29. 障害と支援——イラン・イスラーム共和国の脊髄損傷者をめぐって(細谷幸子)

イランにおける脊髄身障者の対応について、難しい判断を突き付けられることも多いということを知って、心が重くなる。日本でも障害者のために、もっと支援になることはないかと、さらに社会進出を叶えるためにできることはないかと、気になることは多いものの、ほとんど何もできない。イランでも日本でも、脊髄身障者の介護や世話について、最善の方法はないものだろうか、評者も心を痛めている。パラリンピックの選手になれる人は、本当に少数派なのだと確信した。こういった問題は、中東社会でも日本でも、当事者でなければ、知らないまま人生を過ごすことになるので、中東地域の現状について今後も調査を進めて、まさに「等身大の現状」を研究してほしい。

30. 響き合う異なる声——多言語世界のアイデンティティ（細田和江）

中東出身者の多重言語の秘密には、地域的な言語意識と国家を超える紐帯、民族を超える言語意識という、多重なアイデンティティを作る言語意識があり、言語を選ぶということの重要性を教えられる。そこには近代の歴史としてヨーロッパ列強の植民地支配下に置かれる時代があったことも関わってくる。それは日本に生まれて住んで、単純に日本語を母語とする者には理解できない深い文化的心理が働いているようにも思える。それと同時に、この地に住む人々の歴史と文化の豊かさにあこがれも感じるものである。

このテーマは、第11扉の「母語でも外国語でもない言葉」の議論に通じるものがあり、様々な言語意識とともに、過度の情報化という今の世界に、これらの多重言語の文化がどのように貢献することができるのか、また変化を余儀なくされるのか、著者の今後の活躍が期待される。

終. なぜ日本で中東地域を研究するのか？（西尾哲夫）

「なぜ日本で中東地域を研究するのか？」という問いに評者は十分に答えられない。著者は「日本人が中東・イスラーム地域研究をおこなうのであれば、等身大の現地研究をするべきである」と主張しているように受け取れる。日本に住む研究者が中東地域に関心をもって、中東地域を研究することになったとしても、そのすべての研究が等身大の現地研究ではない場合も少なくない。いまだに欧米の研究手段と価値観をそのままに採用して研究する者も多い。さらに、あくまでも日本人らしく、日本的な価値観をもって中東を学び、興味本位の日本人に的を絞って、盛んにイスラームフォビアを煽る人もいる。好き嫌いはあっても、どちらも「日本で中東を研究する人」である。

しかし、終扉の著者は、そのような日本に縛られる中東研究はやめよう、と言っている。

そのためには、どうすればいいのか？評者が『イスラーム世界の人びと』（東洋経済新報社、1984年）の出版に多少ともかかわった経験から言えば、人類学でも歴史学でも宗教学でも言語学でも、故三木亘先生から「現地を暮らす経験を」と言われたことが思い出される。つまり、一般の日本人が興味や関心を持つと持つまいとに関わりなく、自分が肌感覚で手に入れた「等身大の現地研究」の成果だけを余すところなく表現するべきであるというものであろう。少数ではあるが、研究者の中には著者と同様に、日本人という立場を超えて中東の現地に飛び込み、時には命がけで等身大の中東を研究する人もいる。

著者は、「現代中東地域研究」が目指した①文化資源、②自然資源、③知的資源、④人的資源というテーマについて、これまでは別個のテーマ内で孤立していた人々が個人としていかにグローバル化されたコミュニケーション空間に生きているか、ということに具体的な分析の焦点を当てることで「個から世界を構想するための地域研究の新たな方法論を開拓してきた」と言い、「人類の普遍的テーマである『多元的価値競争社会』の可能性を探ることが、今日的学問にとっての最大の課題である」と結論づけている。

著者のこの言葉を忘れないようにして、私たちは、改めて中東・イスラーム世界を日本で研究するという意味を考え直してみることにしよう。本書に所収の30篇の論文が「多元的価値競争社会」を築く第一歩を指し示すものとなるかどうかを考えることは、本書を手にとった者の宿命かもしれない。

（塩尻 和子 筑波大学名誉教授）

高尾賢一郎、後藤絵美、小柳敦史（編）『宗教と風紀——〈聖なる規範〉から読み解く現代』岩波書店 2021年 ix+356頁

本書の狙いを端的に表明しているのは、終章を共同執筆した後藤絵美と小柳敦史の記す「『宗教』と『風紀』という、それぞれに安易な定義を許さない——積極的に言えば豊かな意味を含み持つ——二つの言葉を『と』でつなぐことで何が見えてくるのだろうか」という一文である。書名をみて本書を手取る人の多くが期待するところはまさにこれだろう。

ただし、評者自身としては「宗教」よりも「風紀」を本書がどう扱ってみせるかに強く関心を引かれた。というのも、社会における規範のありようを研究することに力を入れてきた人類学者の一人として、「風紀」